

2005. 2月

1月28日の第6回「子どもの学びを創る会」では、下関少年少女合唱隊の指揮者 原田博之先生に長年の経験から紡ぎ出された合唱指導のコツを教えてください、あっという間に2時間が過ぎた。また、50名の先生方の参加をいただき、大変感謝している。明日からの音楽科授業への意欲が湧いてきたのではと推察している。

昨年12月、国際教育調査の結果が公表され、日本の子どもの学力低下の傾向が明らかになるとともに、これまでの文部科学省の教育政策に対する見直し論が出てきている。学習指導要領の完全実施から短期間であり、「生きる力」の結果を求めるのは性急すぎるという声もあるが、結果が厳しく評価されているのである。

同様に、自校を評価してみよう。学級の子どもの学力を評価してみよう。担任が自分の学級の子どもたちを評価するのではなく、保護者が評価するとどういう結果をもらうか、予想してみよう。年度末に、保護者が学級の子どもたちの学力を公的に評価することは、今のところ、ほとんど聞いたことがないが、国際教育調査の結果のようなものを各小学校も公表する時代がすぐくるのではないかと考える。

学校は、これまで以上に成果が強く求められてきている。学校に課せられた期待や使命にいかに応えられるか、ということが重要な課題である。理想を掲げて、結果を出さなければ、保護者や地域の非難を浴びても仕方ない時代がきている。それは、公立学校は国民・地域住民の税金で成り立っているからである。そのため、学校の自己点検・自己評価は、今や当然だし、評価結果からの改善が最も重視されてきている。教育界は、学校評価や授業評価、教員評価などと、評価の時代に入っている。これらの評価は、確かな成果を求めるための評価であり、学校の信頼を得るためである。

しかし、その学校の成果とは、国際教育調査の結果のような数値向上への期待もあるが、学校に課せられた期待や使命を考えれば、豊かな人間性や確かな学力などの生きる力の向上への期待がより問われなければならない。そのためには、生きる力の向上を示す子どもの姿を想定して評価することが重要であろう。

今から心配なのは、いつの間にか入ってきた成果主義により、教職員がすぐ達成できる低い目標設定をすることである。また、常に成果を意識するため、設定した目標のこと以外、動かなくなることである。さらには、客観評価を示すと評価されないことはやらなくなるということも、教員評価や授業評価には起こり得ることも考えておきたい。評価は、学校改善に使われ、教職員のモラルを高める手段にしたいものである。 (芝)